

[学術論文]

『ボヴァリー夫人』をめぐり一考察

— 「男性化」するエンマに焦点をあてて—

An Examination of “Madame Bovary”

野 田(水 町) い お り

Iori NODA (MIZUMACHI)

Studies in Humanities and Cultures

No. 14

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 14号
2011年2月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
FEBRUARY 2011

[学術論文]

『ボヴァリー夫人』をめぐる一考察

— 「男性化」するエンマに焦点をあてて —

An Examination of “Madame Bovary”

野田（水町） いおり
Noda (Mizumachi) Iori

はじめに

第1章 身体表象が描くジェンダーニュートラルなエンマの姿

第2章 男性化するエンマ

第3章 エンマの男性化が意味するもの

おわりに

要旨 本論文は、ギュスターヴ・フロベール (Gustave Flaubert) の『ボヴァリー夫人』 (*Madame Bovary*) を取り上げ、主人公エンマの「男性化」する姿に着目しながら『ボヴァリー夫人』の再読を試みるものである。その際、エンマが「男性化」する時の条件、心象構造などを考察しながら、エンマに男性的な側面を与えたフロベールの意図を探り、主人公であるエンマの淪落の人生に、自我の目覚めと社会への反発の萌芽を見いだすことを目的としている。

なお、本論文で使用した「男性化」とは、女であるエンマが、男のように振る舞うことであり、男を想起させる身体描写、言動も「男性化」と定義した。また、ここで言う「男」とは、一般的に用いられる「男らしさ」に属する特性のことを指している。

エンマの男性化には、自由の象徴、あるいは社会規範への反抗の萌芽という能動的な側面がある一方で、男性優位社会の歪んだジェンダー構造の受容という受動的な意味もあると考えられる。この二つの男性化は異質のものである。前者は自己解放であり、後者は自己否定という矛盾と両義性を持ち合わせている。エンマの男性化は、『ボヴァリー夫人』が出版された1857年当時の社会が抱えるジェンダー的諸問題を表象するものであり、この相反する二重構造は、自己解放を願った一人の女の人生における葛藤を体現したものであると言えるのではないだろうか。

キーワード : 『ボヴァリー夫人』、エンマ、男性化、ジェンダー、社会規範

はじめに

本論文は、ギュスターヴ・フロベール (Gustave Flaubert)¹の『ボヴァリー夫人』(*Madame Bovary*)を取り上げ、主人公であるエンマの淪落の人生に、自我の目覚めと社会への反発の萌芽を見いだすことを目的としている。論考の方法として、エンマが男性的に描かれている場面やエンマの「男性化」する姿に着目し『ボヴァリー夫人』のテキストの考察を試みる。

文学史上では、『ボヴァリー夫人』は、19世紀のフランスリアリズム文学を代表する傑作とされている。そのストーリーは次の通りである。主人公エンマは、ロマンティックな甘い感傷と夢のような結婚生活に憧れて田舎医者シャルルと結婚するものの、すぐに単調な現実生活と夫の凡庸さに幻滅し、満たされない感情と閉塞感にとらわれて苦悩し、結婚したことを後悔する。しかし、自分の思い描いた生活の実現を諦め切れないエンマは、憧れの現実化と自由を望み、その結果、不倫をし、借金を作り、最終的には服毒自殺をするというものである。

『ボヴァリー夫人』は、エンマの人生における葛藤を描いたものであり、結婚生活に対する落胆、不満足な現実改善のためのさまざまな試み、そして挫折という一連のプロセスの繰り返しを描かれているといっても過言ではない。エンマの葛藤は、ロマンティックな結婚生活に対する過剰な期待、夢想癖、虚栄心などが引き起こしたものであるため、エンマ自身の内的問題であるという研究者もいる。しかし、視点を変えると、『ボヴァリー夫人』は、1人の女性が規範に縛られず自由に生きたいと願い、それを具現化しようとして失敗する物語であるとも言える。自己解放を願う女の上昇志向が叶わないことを描いたのには、フロベールの何らかの意図があるのではないか。エンマの人生における葛藤は、当時の社会背景や道徳観念、社会規範などの外発的問題とも関わるのではないか。

そこで、本論文では、前述の推論を考察するため、エンマの「男性化」を取り上げることにする。テキストにおけるエンマの身体表象、目線、服装、振る舞いなどを観察すると、エンマがまるで男のように、あるいは男を連想させるように描写されていることが分かる。フロベールが、女であるエンマを男のように描いたのは、いかにも不自然である。落胆、挑戦、挫折というエンマの人生の葛藤において、「男性化」は何を意味し、何を表現しようとしているのか。筆者は、このようなエンマの「男性化」を、規範性の強い社会への反抗であると考えた。そこで、本論文では、「男性化」するエンマに焦点をあてて『ボヴァリー夫人』を再読することで、『ボヴァリー夫人』に描かれた、エンマの社会への反発の萌芽を明らかにし、『ボヴァリー夫人』の新たな読み方を提案することにしたい。

* *Madame Bovary* のテキストには、アルベール・チボーデ (Albert Thibaudet) とルネ・デュメニル (René Dumesnil) 編集によるブレイアッド版全集の第1巻を用い、引用はその頁のみを記す。(Oeuvres complètes de Gustave Flaubert, “Bibliothèque de la Pléiade”, Gallimard, 5 vols, 1983.) なお、テキストの記した下線は、筆者による強調である。

¹ Gustave Flaubert (1821-1880) 以後、フロベールと記載する。

しかし、本稿では、エンマの「男性化」が、『ボヴァリー夫人』の時代背景である、七月王政期のジェンダーに関する諸問題を内包する可能性があるという言及に留めておきたい。エンマの「男性化」は、たしかに、社会問題と並べて論じる必要がある。しかし、本論文では、テキストを再読することにより、エンマの「男性化」の意味を明らかにすることを目的とし、ジェンダー的諸問題とエンマの「男性化」の関係や社会背景の考察については、稿をあらためたいと考えている。以下に、「男性化」の定義、現在までの研究史、本論の構成を述べる。

男性化の定義

エンマの「男性化」は、端的に言うと、女であるエンマが、男のように振る舞うことである。したがって、エンマが男のように振る舞っていれば、それを「男性化」と呼ぶことにする。ここで使用する「男」とは、一般的な「男らしさ」に属する特性のことを指している。男のような身体描写、男を連想させる振る舞いについても「男性化」の対象とする。ただし、本論での「男性化」は、エンマが本来持っている男性的性質も、社会規範に対する反抗の萌芽として表れる男性的な言動も含有する。そこで、それらを区別するため、エンマの先天的な男性気質については第1章で、社会規範への挑戦としての男性化については第2章、第3章で述べることにする。

研究史

現在までの研究史をまとめると、エンマの男性化については、雑誌*Artiste*におけるボードレールの書評、バルガス＝リョサ『果てしなき饗宴』、工藤庸子『恋愛小説のレトリック』、松澤和宏『ボヴァリー夫人を読む』などで指摘されている。これらの先行研究が指摘する男性化と、筆者の定義した男性化では、正確な意味合いが異なるのだが、エンマの男性的側面に着目した数少ない記述として、また、筆者の男性化の定義との差異化を示すために、以下に紹介したい。

たとえば、ボードレールは*Artiste*の書評の中で、〈Madame Bovary était un homme.〉「ボヴァリー夫人は男である」と述べた。そして、エンマが男であるのは、作者であるフロベールがエンマに投影されているからであると結論付けている。しかし、これは、「ボヴァリー夫人は私だ」(= Madame Bovary, c'est moi.) と述べた、あまりにも有名なフロベールの言葉の裏付けであり、エンマの男性化そのものを論じたものではない。また、バルガス＝リョサや工藤庸子は、エンマの男性化についてボヴァリズムと関連させて論じている。ボヴァリズムとは、ジュール・ド・ゴーチエ²によって定義された言葉で「現実とは異なるように想像する能力のこと」を指す。たしかに、女であるエンマが「自分が男であったら…」と想像する点はボヴァリズムと合致する。しかし、これはエンマの男性化を指摘したことにはならず、両者とも、エンマの男性化についての具

² Jules de Gaulthier ゴーチエは、感情的ボヴァリズム、知的ボヴァリズム、個人的ボヴァリズム、集団的ボヴァリズムといった分類を試みている。

体的な記述はない。エンマの男性化をボヴァリズムのみで説明することは困難だからであろう。さらに、松澤和宏は、エンマの男性化について、性差の規範を逸脱する危険をはらんでいると紹介している。この指摘は、筆者の視点と一番近い。つまり、エンマの男性化が規範性の強い社会への萌芽であるという見方である。しかしながら、『ボヴァリー夫人を読む』のテキストの中で、エンマの男性化についての具体的な分析はなされていない。

したがって、これまで、男性化のいくつかの指摘はあるものの、エンマが男性化する意味、男性化する時の条件、エンマの心象構造までは言及されていないため、分析もテキストの考察も十分とは言えないのである。

論文の構成

論文は、以下のような構成で行う。まず、第1章で、エンマの先天的な男性気質を確認し、エンマが男性、女性の両方の性を持つ存在であることを身体表象の点から分析する。次に、第2章では、エンマの不倫相手であるロドルフ、レオンとの関係を考察対象とし、エンマが男性化していく姿を分析する。そして、第3章で、エンマの男性化の意味を探り、エンマの男性化が「自己解放」と「自己否定」という矛盾した両義性を持ち合わせていることについて言及する。

第1章 身体表象が描くジェンダーニュートラルなエンマの姿

第1章では、エンマの身体表象に着目し、エンマが女性的側面と男性的側面の両面を持つジェンダーニュートラルな存在として描かれていることについて言及する。なお、ジェンダーニュートラルという単語の意味として、本論文では、「男性的側面と女性的側面の両性を持ち合わせた状態」と定義したい。

1、エンマの女性的側面

シャルルは骨折したルオーじいさん（エンマの父）を往診するために、ルオーじいさんの農場に到着する。すると、裾にフリルが3つある、青いメリノ服を着た若い女がシャルルを玄関口に出迎える。この若い女がエンマである。その際、テキストでは、農場の入り口にいるシャルルの目が玄関に出迎えたエンマの姿を遠くにとらえ、まるで風景描写と同じようにエンマの外観が語られている。ルオーじいさんの治療が終わり、その後、シャルルの視線はエンマに向けられ、そこで初めてエンマの容姿について主観的で、突っ込んだ描写が続く。以下は、シャルルがエンマと初めて向かい合ったシーンでのエンマの描写である。エンマの姿はシャルルの視線を通して描写され、読者はシャルルのまなざしの中でエンマの姿を確認していく物語の展開になっている³。

³ 読者の視点、登場人物の視線に着目した『ボヴァリー夫人』のストーリー展開については、拙稿「『ボヴァリー夫人』におけるシャルルの役割についての一考察」（『人間文化研究』、2009年）で考察した。

シャルルは、彼女の爪の白さに驚いた。爪はつやつや光って、先が細く、ディエップの象牙細工よりも、もっときれいにみがかれ、先をまるく切ってあった。一方、彼女の手は、それほど美しくなかった。おそらく白さが十分には足りないだろう。そして、関節のところは少し骨ばっていた。また、少し長すぎて、輪郭に曲線の柔らかさが足りなかった。(中略) 白い折襟から頸筋が出ていた。髪はきれいな細い線でまん中から分け、両側の黒髪はなめらかでそれぞれ一つにぴったりとくっついているようだ。分けた筋は、頭の曲線どおりに軽くくぼんでいる。髪は、耳たぶをちょっと見せ、額の両際のところでは田舎の医者が見て見るようなウェーブを作って、後ろの豊かな鬘と一つになっている。頬はバラ色だった。まるで、男のように、胸のところの二つのボタンのあいだにべっこうの眼鏡をさしていた。(pp. 33-34.)

引用はエンマの外見を描写したものである。このように長く、しかも詳細に描写されているにもかかわらず、エンマのイメージは断片的でまとまりがない。エンマがどういう容姿をもった人物なのか、どこがシャルルの気に入ったのか、シャルルにとってエンマがどんな印象に映ったのか読者には全く分からない。あまりにも細部の描写が多すぎて、エンマの全体像が見えてこないからである。しかし、なぜエンマの全体像ではなくて、ディテイルが語られているのだろうか。小倉孝誠は、『<女らしさ>はどう作られたのか』(法蔵館、1999年)の中で、19世紀の女性の身体表象について、次のように説明している。「女性の身体の全体ではなく、ひとつひとつの部分で個別的に描くという手法は、当時発達しつつあった解剖学のインパクトを示している。女性の身体は、全体を部分の集積と分類し、目録を作成し、それらを整理し、それを通じて身体を制御し、支配しようとする男性のまなざしの浸透作用を受けている⁴。」

この理論に沿ってエンマの身体表象をとらえると、エンマの身体は、細部に着目され、男性の視線にさらされていた当時の女性たちの描かれ方と同じである。たしかに、小説に最初に登場した時のエンマは、男であるシャルルの視線の中に見いだされ、シャルルの視線を通して語られる構成になっている。フロベールは「男から見られる客体」としてのエンマの姿を、明確に読者に提示している。のちに夫となるシャルルの視線の中にとらえられ、ディテイルを描かれたエンマは、その最初の登場シーンから、保守的で男性優位な社会の被害者となるべくフロベールによって計画されていたかのようである。さらに、細部の描写に力点が置かれたこの独特な描き方により、エンマの全体像が欠落しているのは、アイデンティティーの喪失とも考えられる。この点でも、エンマは、当時の規範に従い、个性的であることを容認されない女性一般の姿を表象しているとも言える。では、次に、テキストに描かれたエンマのディテイルを分析し、エンマの男性的側面について見ていきたい。

⁴ 小倉孝誠著『<女らしさ>はどう作られたのか』法蔵館、1999年、p. 121。

2、「あいまいさ」に見られるエンマの特性

テキストには、美しい白い爪、曲線を描く髪の毛のウェーブ、バラ色の頬などがエンマの外観を示す断片として描かれている。これらはいかにも女性的である。白さ、柔らかな曲線、恥じらいを表現したバラ色の頬は、当時の社会が望む女性像と見事に合致している。ところが、一方で、先に述べた引用が示すように、女性的なはずのエンマの手の関節は骨ばっており、柔らかみがなく、男のようにべっこの眼鏡を胸にさしている。このエンマの身体描写の不均衡さは、一体何を表すのだろうか。エンマの描写はさらに続いている。

彼女の中で一番美しいもの。それは目だ。茶褐色なのだが、まつ毛のせいで黒く見えた。まなざしは、あどけなく、大胆で、まっすぐに見据える目であった。(p. 33.)

小倉が指摘するように、当時の女性たちは、男性から見られる客体でしかありえなかった。ところが、エンマの目は男であるシャルルをとらえ、その姿を大胆にみすえている。これは極めて不自然である。男のまなざしの中に映し出されたエンマは、当時の女性たちに共通する「見られる客体」でありながら、一方で、自分を見ている相手に対して「視線を送る主体」でもあるのだから。これは、エンマが男性的側面を内包している可能性を示していると筆者は考えている。

さらに、エンマの目の色に関しては、茶褐色であるが、黒く見えると表現されている。つまり、「エンマの中で一番美しいもの、それは目である」とCe~que, c'est~の強調表現を使って断言しているにもかかわらず、エンマの目は、大胆に見すえるところは男性的でもあり、あどけないまなざしは子どものようでもあり、アンバランスでとらえどころがないうえに、目の色さえ、本来は茶褐色なのに黒く見えるなど、あいまいではっきりと断言できていない。なぜ、フロベールは、エンマをこのように描いたのだろうか。

エンマの身体描写の特徴は、ディテイルにこだわった断片的な描写方法がエンマの女性的な側面を強調したものであるにもかかわらず、テキストの内容は、女性とも、男性とも特定できない、いかにも不自然でアンバランスなものになっていることである。この描き方によって、フロベールは、男性とも女性とも特定できない、両性を合わせ持つジェンダーニュートラルなエンマの姿を表現しようとしているのではないだろうか。しかし、エンマは、なぜこのように描かれたのだろうか。

子どものころは、男女の別はなく、誰もがジェンダーニュートラルであったはずである。しかし、当時の女性たちは、成長の過程で社会が望む女性像を押し付けられ、無言のうちにそれを受容していったに違いない。もちろん、男性たちにも同じような社会的圧力はあったかもしれないが、女性に対する規範性の強さは男性のそれとは比べ物にならない。とくに、『ボヴァリー夫人』の社会背景とされる七月王政期(1830-1848)は、産業革命による経済変化が人々の生活や

道徳観にさえ影響を及ぼし、ブルジョアを中心として、家父長制の保守的なモラルが形成された時期でもある。

当時の女性たちは、マナーとして、男性と視線を合わせることはしなかった⁵。しかし、エンマは、成長した後も、子どものようなジェンダーニュートラルな性質を保持したままであった。それを示すかのように、エンマの視線は、男のようにまっすぐに対象をとらえている。この点からだけでも、エンマが、男性的側面を保持しており、当時の「女とはこうあるべき」という規範を受け入れた、いわゆる普通の女性とは異なっていたことが分かる。シャルルとの結婚生活において、エンマは当時の規範に沿って、ただひたすらに女性の役割を果たさねばならなかった。しかし、エンマはジェンダーニュートラルな存在として描かれている。結婚生活で女の役割のみを強調されたエンマは、性のバランスを崩し、いつしか精神が混乱し、神経の病を発症したのではないか。エンマが夫となるシャルルとの最初の出会いのシーンでエンマがジェンダーニュートラルに描かれたのは、エンマの不遇の結婚生活へのプレリュードなのかもしれない。

さて、第1章で、エンマが男性であり女性でもある、ジェンダーニュートラルな存在であることを述べ、フロベールがエンマに両性を与えた意図を探ってきた。エンマのジェンダーロールは、女性的なものに限定されるものではなく、エンマの不幸は、社会が求める「女」としての役割を押しつけられたことによる可能性も示唆した。

しかし、テキストを読み進めると、じつは、エンマは付き合う相手によって対応を変えていることが分かる。ある相手には女性的な部分を見せ、他の相手に対しては男性化し、性の逆転現象さえ起こっている。そこで、第2章では、男性化するエンマを見ていきたい。

第2章 男性化するエンマ

エンマは、退屈な田舎での結婚生活に満足できず、また、凡庸な夫を愛することもできず、社会規範から逸脱し、不倫をし、淪落の人生を歩む。その際、エンマは、七月王政期のブルジョア社会が暗黙のうちに依拠していた、性差の規範をも逸脱している。

『ボヴァリー夫人』の背景である七月王政時代は、ブルジョアが政治、経済の主導権を握り、産業革命の下で経済が急成長を遂げた。それに伴い、性差分業、パブリック・プライベート、さらに余暇の概念などが生まれ、保守的な家父長制の社会規範が形成された。エンマの思考や身振り、振る舞いは、不倫が進行するにつれて、ブルジョア社会が女性に対して要求していた行動の規範からすこしずつ外れていく。その逸脱する様子は、エンマが男性化していくというプロセスに明瞭に表れている。第2章では、不倫相手である、ロドルフとレオンとの関係に焦点をあてる。

⁵ 七月王政期中産階級の子女たちのマナーを記した女子用百科事典の研究は、小山美沙子『7月王政下のある女性用百科事典』（日仏教育学会第3号、1997年）がある。

なぜなら、この2人は、エンマが社会規範のみならず、性差の規範さえも逸脱するきっかけとなっているからである。不倫相手の前で男性化していくエンマの姿を考察し、エンマが男性化する意味を問いたい。

なお、最初に定義した通り、男性化とは、エンマが男のように振る舞い、男を連想させるような行動をし、男のように描写されている状態のことを指す。本章では、ロドルフとレオンという2人の愛人との関係を考察しながら、エンマの男性化の意味が異なっていく過程も明らかにしていきたい。

1、ロドルフとの関係における男性化

エンマとロドルフが最初に会った時に、ロドルフが感じたエンマの印象は次のように記されている。

かわいい女だな。きっと（結婚生活）に退屈しているに違いない。都会に住みたい、毎晩ポルカを踊りたいと。かわいそうな女！まな板の上で、鯉が水を恋しがるように、あの女も恋に憧れているにちがいない。（中略）しかし、あの女はこちらの心の奥まで錐のように入ってくる目をしている。それにあの青白い色！（中略）おれは青白い肌の女が大好きだ！（p. 142）

第1章でも述べたように、エンマの印象において、特筆すべきは目の描写である。シャルル、ロドルフ、レオンともに、エンマに関わった男たちは、最初にエンマの目の美しさに心を奪われている。「心の奥まで、錐のように入ってくる目」は、シャルルに出会った時と同様に、男性的なイメージで描かれている。一方で恋に憧れ、青白い肌を持つエンマは女性的である。当時、病気がちで青白い肌は、はかなげな女性を象徴するとされていた。やはり、シャルルと出会った時と同様に、エンマは男性とも女性とも特定できない、ジェンダーニュートラルな存在として描かれている。

その後、物語は進行し、ロドルフがエンマに恋心を打ち明ける。そして、シャルルとの結婚生活に辟易していたエンマは、徐々にロドルフに心を開いていく。プラトニックであったエンマの恋が、肉欲的になるのは、ロドルフと乗馬に出かけた時のことである。馬に乗ってロドルフと森を散歩する時、エンマは長いドレスで肌を隠し、顔を覆う大きなヴェールを身につけ、男物の帽子をかぶっているとテキストに描写されている。乗馬用の衣装を持っていなかったエンマは、シャルルに言われて衣装を新しくあつらえた。したがって、ヴェールとドレスは新しく作ったものであろう。しかし、男物の帽子が誰のものかという記載が見当たらない。家を出る時から男物の帽子をかぶっていたことを考えると、この帽子はシャルルのものだと考えるのが一番自然である。

真新しい、女性的な服装のエンマが、男物のシャルルの帽子をかぶるのは、先に述べた目の描写と同様、いかにも不自然である。なぜ、エンマは男物の帽子をかぶっているのだろうか。この時、エンマにとって、男物の帽子はどのような役割をしているのだろうか。

じつは、ロドルフに恋を打ち明けられ、不倫をそそのかされても、エンマは一度断っている。

「**だけど、とエンマは言った。少しは世間の考えにも従い、世間の道徳を守っていかねばなりません。**」(p. 156)

これは、社会規範に留まろうとするエンマの姿を表している。しかし、乗馬に疲れて少し休んだ後、エンマはロドルフと不倫の関係を結ぶ。以下は、まさにその瞬間の描写である。

「**エンマの布地が男のピロードの服にからみついた。彼女はためいきでふくらむ白い頸筋を仰向きに反らせ、気を失ったようになって、さめざめと泣きながら、長い間震えながら、顔を覆いながら男に身を任せた。**」(pp. 171-172)

社会規範、道徳上の問題から直接的な表現を避けるため、フロベールは、ドレスの布地で不倫の関係を表現していると考えられる。顔を覆う行為は自身の背徳行為を恥じるようでもあり、先ほどまで身につけていたヴェールを思い起こさせるものでもある。不倫が決定づけられるその瞬間、エンマが身につけていたドレス、ヴェールについては記載があるが、シャルルの男物の帽子だけが描写されていない。なぜなら、エンマは最初に帽子を外し、脇に置いているからだ。男物の帽子は、シャルル自身であり、エンマの男性的側面を表象するものであり、エンマを規範に留め置く柵の役割をしていたのではないか。男物の帽子を外した瞬間、エンマはシャルルを放棄し、男性的側面を失い、女となった。その結果、ロドルフと愛を交わし、社会規範の中に自分をとどめておいた柵を超え、道を踏み外すのである。その後、ロドルフと別れ、自宅に帰ったエンマは、自分の顔を見て驚く。

「**鏡をのぞきながら、うつった自分の顔にハッとした。彼女の目がこんなに大きく、こんなに黒く、こんなに深ぶかとしていたことはいままでになかった。**」(p. 173)

ここで、エンマの目が初めて明確に描写されていることに留意せねばならない。今まで、エンマの目は、エンマの中でもっとも特徴的でありながら、とらえどころがなかった。しかし、ロドルフとの関係を結んだ後は、上記の引用の通り、はっきりと「大きく、黒く深々としている」と描写されている。このことは何を意味するのだろうか。

エンマは自分の姿を鏡に映し、その姿に驚いている。第一章で、エンマの描写は断片的で全体像が促えにくいこと、そのディテールにこだわった描写方法によってエンマのアイデンティティの喪失が表現されている可能性があることを指摘した。しかし、今、「見られる客体」であったエンマは、鏡というツールを使って自分自身をみつめ、自らを見いだそうとしている。鏡に自らの姿を映し自分自身をみつめたまさにこの瞬間、エンマのアイデンティティが形成される可能性が十分にあった。ところが、エンマは関心の対象を自分にではなく、愛人に向け、そしてロドルフとの不毛な恋に落ちていく。

エンマはロドルフに、もう一度私の名前（エンマ）を呼んで、もう一度愛していると書いてとせがんだ。(p. 173)

「私、あなたを愛してる」と、エンマは男の首に抱きつきながら答えた。(p. 174)

エンマの姿は、男に恋をする女性そのものである。エンマはロドルフに過剰なまでに愛情を注いだ。一方で、エンマは、ロドルフを恋しく思えば思うほど、自分を家庭に縛り付けるシャルルが疎ましくてならなかった。そして、半年も経った頃、とうとう、エンマは、シャルルを捨て、家を出る覚悟をする。家出を決心した後のエンマは、次のように描かれている。

恋をする習慣の効果だけで、ボヴァリー夫人の態度は一変した。視線がより大胆になり、振る舞いも自由になった。まるで、世間をばかにするかのようになり、くわえ煙草でロドルフと散歩するようになった。(p. 201)

ついに、ある日、エンマが、男性風にチョッキに身を包んで乗合馬車つばめ号からを下りるのを見た時、今まで（エンマのそうした行為を）疑っていた人も、もはや疑わなくなった。(pp. 201-202)

先に述べたように、恋をしている時のエンマは女性的である。しかし、夫を捨てて、恋人と逃げることを決意した後は、視線、振る舞い、服装などが、まるで男のように変化している。ロドルフとの関係におけるエンマの男性化は、夫を捨て、自分の思い通りに生きたいと願う気持ちの表れであると言えるだろう。自由を願い、規範から逸脱することを決意した時、エンマは男性化した。エンマの男性化は、女性の自由が制限されていた七月王政期のジェンダー的秩序への挑戦、社会への反抗の萌芽を表しているのではないだろうか。

この後、男女の役割が、まったく逆転してしまうという状況が生み出される。第2の愛人レオンとの関係においてである。

2、レオンとの関係における男性化

エンマとレオンの関係は、最初からエンマの方が優位だった。エンマに最初に懸想したのはレオンの方であったからだ。エンマは男性化し、レオンを支配した。レオンは、人妻であるエンマを愛しつつも思いを伝えられず、一度はエンマの前から姿を消している。しかし、レオンが去ってから何年も経って、エンマはシャルルとルーアンに劇を見に行き、そこで偶然にレオンに再会し、不倫の関係を結んでしまう。シャルルに内緒でエンマとレオンは逢瀬を重ね、互いに愛し合う。エンマとレオンの関係性は次の引用で明らかにされよう。

エンマはレオンを「坊や」と呼んだ。

「坊や、私のこと好き？」(p. 273)

エンマは過激、大食い、淫蕩になった。(中略)レオンは、ただ、エンマの気に入りたいために、エンマのどんな趣味も受け入れた。エンマはやさしい言葉とレオンをとろけさせるキスを心得ていた。(p. 282-285)

エンマは、レオンとの逢引の予定を決め、会いたい時には、たとえレオンが仕事中でも呼び出した。レオンに、ルイ13世⁶みたいに顎鬚をはやすこと、黒い服を着ること、自分と同じカーテンを買うことなど、あれこれ指図するようになった。レオンは、エンマに会うたびに、会わなかった間に何をしていたのか報告させられた。エンマは淫蕩、大胆になり、男のように煙草を吸いたがった。以上のことから、レオンとの関係においては、ジェンダーロールが逆転しているのが分かる。それは、次の引用が明確に示している。

エンマがレオンの情婦というよりも、むしろレオンがエンマの情夫だった。(p. 285)

エンマは、「もし、二人で暮らしたら」「もし、ここがパリだったら」と夢を紡ぐことはあっても、ロドルフの時のように、シャルルとの関係を解消し、レオンと二人で逃げようとは考えていない。ロドルフと不倫をしている時は、ロドルフを愛すれば愛するほどシャルルが憎くてたまらなかったが、レオンの時は、そうではない。「エンマは、以前よりも夫に愛想がよくなった。ピスタチオ入りのカスタードクリームを作ってあげたり、夕食後にワルツを弾いたりした。シャルルは自分が世界一の幸せ者だと思っていた⁷」という一節はそれを良く表している。なぜ、そのようなことが起こるのだろうか。

⁶ ルイ13世は、王位に就いた後、摂政である母親を遠ざけた。エンマは、シャルルの母親と折り合いが悪いので、自ら母親を遠ざけたルイ13世に憧れた可能性がある。

⁷ *Madame Bovary*, p. 358.

エンマとレオンの関係はエンマが主体である。男性化したエンマがレオンを支配していた。しかし、最初の不倫相手であるロドルフの場合は、ロドルフの方が主体者であった。そこには、エンマが夫と恋人に二重に支配される構造がある。エンマはそれには耐えられず、どちらかを切り離そうとする。ロドルフとの場合は、夫であるシャルルの支配から逃れようとした。しかし、レオンとの場合は、支配—被支配の関係はあるが、一般的なジェンダー構造とは逆であるため、ロドルフの時のような支配の二重構造は成り立っていない。レオンの前でエンマは男性化し、すでに精神的に開放されて自由を得ているため、ロドルフの時のように、シャルルを切り離さなくとも、関係を持続させられる環境にある。そのため、シャルルに対して、当時の社会が求めた模範的な妻の役割を果たすことができたのである。

しかし、エンマの自由は完全なものではなく、エンマは常にシャルルの支配下にある。シャルルがいかにかに善良で、お人好しで、エンマを深く愛し、エンマのために自らの生活を投げ打つような男であっても、エンマにとっては自分を支配する疎ましい「夫」でしかありえなかったのである。チボーデは、シャルルの罪は、「そこにいること」と述べた⁸。シャルルはエンマの苦しみの元凶であり、エンマの不幸はシャルルと結婚した時から始まっている。ここには『ボヴァリー夫人』のあまりにも悲しいアイロニーが表現されている。

さて、第2章では、男性化するエンマについて見てきた。エンマの男性化は、複雑な関係性の中で行われ、かつ、エンマの心理状態を体現している。たとえば、ロドルフとの関係において、夫を切り捨てると決意した時のエンマが男性的に描かれているのはエンマの心理と男性化を照応させたものである。さらに、エンマとレオンの関係は、「欲望する女と、欲望される男」、あるいは、「所有する主体としての女と、所有される客体としての男」であることも分かった。社会に不安をもたらすこのジェンダー的転倒は、女の性的欲求を認めることを拒否し、それを隠していた19世紀前半、とくに七月王政期の社会的ディスクルールに対する、あからさまで、スキャンダラスな挑戦であった⁹。そのため、『ボヴァリー夫人』は不道德、反宗教のかどで裁判になっている。しかし、エンマが男性化し、夫を捨てると決意し、レオンを手なづけ、支配する姿に、私たちは、規範性の強い社会に対するエンマの反発をみる事が出来るのではないだろうか。

⁸ アルベール・チボーデ著 戸田吉信訳『ギュスターヴ・フローベール』より、第5章『ボヴァリー夫人』、法政大学出版局、2001年、p.121。

⁹ 松澤和宏『『ボヴァリー夫人』を読む』、岩波書店、2004年。

第3章 男性化するエンマが意味するもの

第1章、第2章を通じて、男性的でもあり、女性的でもあるエンマの姿をみてきた。2章で述べたように、エンマは不倫相手のロドルフの前で女性から男性へと変化し、レオンとの関係では、ジェンダーロールを逆転させ、男性そのものの姿で描かれている。しかし、夫であるシャルルの前で男性的側面を見せたのは、最初の出会いのシーンのみであり、それ以降は、女として、妻としての側面が強調されて描かれている。シャルルは凡庸で、あまりにも平凡な男である。ロマンティックな生活に憧れるエンマにとって、シャルルはつまらないだけの存在にほかならない。にもかかわらず、なぜ、エンマはシャルルの前で男性化しないのだろうか。この問いに答えるため、まずは、エンマにとって、男性化することがどのような意味を持つのか、分析していきたい。

1、自由の象徴としての男性化

エンマは、シャルルの子どもを妊娠した。エンマは子どもに対し、次のような希望を持った。

エンマは男の子が欲しかった。子どもは強くて、たくましくなるだろう。ジョルジュという名前をつけてやろう。エンマは自分の過去の空虚さを埋めるように、子どもに対して希望を持った。(p. 126.)

なんといっても男は自由だ。いろいろの欲望や国々を駆け巡り、邪魔者を切ってどんなに遠い幸福でもつかむことができる。しかし、女は、いつまでたっても邪魔されるばかりだ。(p. 130.)

引用が示すように、シャルルの子どもを妊娠したエンマは、男の子が生まれることを望んでいた。自分の無力感、空虚さを埋めるために、子どもに対して埋め合わせの希望を抱いたのである。「なんといっても男は自由だから」という一節は、エンマの結婚生活が、いかに閉塞的なものであるかを表すと同時に、自由を得られるのは男性だけであり、女であることがいかに不自由で、窮屈であったかを示している。つまり、エンマにとって、女であることは窮屈そのものであり、女性的なものは、不自由の象徴なのである。

たとえば、当時の女性たちが教養として身に着けていたピアノ、写生、刺繍などは、まさに、社会が求めた良妻賢母型の「理想の女性像」を補完するものであり、まさしく女性的なものであるが、エンマにとっては、自らを苦しめる不自由の種でしかない。

これからこんな日が、永久に変わらず、数限りなく、また、何一つ起こらずにつづいて

いくのだろうか！（中略）エンマは音楽をやめた。弾いたって何になる？誰が聞いてくれる？エンマは、デッサンノートも、刺繍も戸棚の中にしまい込んでしまった。何になる？何になる？針仕事は、エンマをいらいらさせるだけだった。（p. 74）

引用の通り、エンマはピアノ、写生、刺繍などを自らの意志でやめ、自らを苦しめる不自由の種を遠ざけた。エンマは当時の中産階級の女性たちがそうであったように、修道院で良妻賢母教育を受け、刺繍、デッサン、ダンス、ピアノなどを教え込まれている。しかし、前述のように、エンマにとって、女性的なものは不自由で窮屈でしかない。当時の中産階級の女性に必須とされた教養をエンマが自らやめたことは、女性的側面を放棄し、自らの不自由を断ち切る行為であり、後に訪れる男性化の布石となるものである。

しかし、結局、女の子が生まれてしまい、エンマは出産の後、子どもに顔をそむけて倒れてしまう。女である自分の叶わない希望を子どもに託したものの、自分と同じ性別の子どもが生まれては、希望が持てない。そこで、エンマは自らが徐々に男性化していくのである。

つまり、男性化するエンマは、自由の表象である。「生まれてくる子どもは男の子であって欲しい」と埋め合わせの希望を持ったのは、エンマにとって、男が自由の象徴であったからにほかならない。私たちは、不自由の象徴であった女性の教養を自らの意志で辞め、女性的側面を放棄するという行為や、自由を求め、男性化するエンマの姿に、社会への反発を見ることができる。

一方で、エンマの女としての苦しみも読みとれる。当時、女性には離婚の権利も、居住権も、財産権もなく、男性なしに生活することは不可能であった¹⁰。エンマが生き続けるには、女でなくてはならなかったのである。エンマが唯一、シャルルの前でのみ女性であり続け、閉塞感と苦悩に満ちた結婚生活の中でも男性化しなかったのは、このような理由があったからだろう。また、シャルルとの結婚の窮屈さ、不自由さ強調するというフロベールの意図もあっただろう。のろまで鈍感、男らしさのかけらもないシャルルの前で、ただひたすらに女の役割を全うせねばならないエンマの姿に、女として生きるのがいかに窮屈で苦しいものであったかを、フロベールは示しているのではないだろうか。

これまでの考察により、女性的な役割や女性的なものは不自由を表象し、男性化は自由の象徴であるという『ボヴァリー夫人』におけるエンマの心象構造が明らかになってきた。では、次に、エンマの男性化が示すもう一つの側面について見ていきたい。

¹⁰ 1804年の「民法典」（ナポレオン法典）には、旧213条で妻の夫に対する服従の義務、旧214条で妻は夫とともに居住し、夫が居住するに相当するところにはどこでも夫に従う義務を負う住居の義務、1421、1428条で、夫の財産的支配について、夫の固有財産の管理権・処分権および共通財産の管理権・処分権、さらに妻の固有財産の管理権はすべて夫に与えられ、妻には妻の固有財産の処分権のみを与えられたことが定められている。また、「夫権」という妻の個人的活動に対する監督権、家事に関する決定権を絶対的に定めたものがあり、夫は妻の交際関係において、特定の訪問を行うことができた。また、妻の文通について、原則として、書簡を先に開封し、捨てることも可能であった。妻が職につく場合は、夫の許可を得なければならなかった。

2、自己否定としての男性化

前述のように、筆者は、エンマの男性化は自由の表象であるとした。しかし、エンマの男性化には、複雑な問題が隠されていることに注意しなくてはならない。ここで、次の引用を紹介しよう。これは、愛人のレオンが自分の思い通りにならないので、激昂する場面である。

レオンは男らしいことが何も出来ないで、弱虫で、平凡で、女よりもぐずぐずしていて、しかも、けちで臆病だ。(pp. 288-289)

引用の中で、男性化したエンマが、愛人であるレオンのことを「女よりもぐずぐずしている」と言っていることに着目したい。男性化したエンマは、レオンを批判しながら、女を見下し、女たちをも批判していることが読みとれる。つまり、弱虫、平凡、けち、臆病、こうした言葉は、女性に向けて発せられた言葉である。エンマは、まるで自分が女であることを忘れてしまったかのようなのである。このことは何を意味するのだろうか。

女性であるエンマが、女性として自由に、思うように生きることは、当時の社会規範の制約もあり、不可能であった。したがって、生まれてくる子どもに願いを託すものの、女の子が生まれてしまい、絶望したエンマは、自らが男性化することを選ぶ。そして、実際に男性化すると、女性を卑下し、批判さえしている。まるで、夫の保護なしには生きることができない、苦みにさいなまれながら結婚生活を続けなくてはならない、無力で、弱い自分を否定するかのよう。これは、想像していた理想的な結婚生活を送ることができない「現在の自分」を否定するだけでなく、「女である自分」をも否定しているとは考えられないだろうか。つまり、エンマの男性化は、「女であること」の否定であり、男性への「転化」に過ぎないのではないか。

2人の不倫相手の前で男性化したエンマは、家父長的な男性優位社会を模倣することで、一見すると優位に立ち、性差の規範を逸脱し、自由を得たように見える。たしかに、筆者は、エンマの男性化は自由の象徴であると結論づけた。しかしながら、エンマの男性化は、当時、自由を得られるのは男性のみであることを示しており、女性が女として生きることがいかに困難であったかを物語っている。そしてまた、女であるエンマが男性化するという事は、「女よりもぐずぐずしている」の引用が示すように、女であることの否定であり、じつは、女性が男性に憧れるという歪んだ構造を作り出し、保守的な男性優位社会を強化してしまう側面もあると考えられるのである。したがって、エンマの男性化には、ジェンダー規範への抵抗と挑戦という能動的な側面と、男性優位社会を認め補強するという、相反した複雑な二重の構造があるのである。

フロベールは、*un livre sur rien* (=無についての書物)を書きたいと書簡に記している¹¹。自由

¹¹ *Gustave Flaubert, Correspondance II*, p. 186. (1852年1月16日、ルイーゼ・コレ宛ての書簡より)

を願い、満たされない結婚生活から逃れるために男性化したエンマの挑戦は、自己解放と自己否定という、全く矛盾した二重の意味を持っている。エンマの男性化は、結局、何ら事態を好転させることもなく、何も生みださず、エンマを服毒自殺へと誘うだけであった。フロベールは、男性化における二重構造を通じて、エンマの人生における葛藤や挑戦が、まったくの「無」であったことをイロニックに表現しているのかもしれない。

おわりに

本論文では、エンマの男性化に焦点をあて『ボヴァリー夫人』を再読し、エンマの男性化の意味を探ってきた。

第1章では、エンマの身体表象を通じて、ジェンダーニュートラルなエンマの姿を明らかにした。これにより、女でありながら、男性的側面を保持していたことがエンマの不幸や苦悩の原因であることを指摘した。

次に、第2章では、男性化するエンマの心象風景を明らかにするため、エンマが誰に対し、いつ、どのような条件で男性化するのかを考察した。その結果、自由を願い、規範から逸脱することを決意した時、エンマは男性化することが分かった。これにより、筆者は、エンマの男性化は、エンマの心理状態と無縁ではなく、さらに、七月王政期のジェンダー的秩序への挑戦、社会への反抗の萌芽を表していると結論付けた。

最後に、第3章では、エンマの男性化する意味を考察した。エンマの男性化には、自由の象徴、あるいは2章で述べたようなジェンダー秩序への挑戦や規範への反抗の萌芽という側面がある一方で、男性優位社会を受容し、強化するという二重の意味がある。ロドルフとの関係においては「自由にふるまうこと」、レオンとの関係においては「女を支配し、否定すること」。この2つの男性化は異質のものである。前者は自己解放であり、後者は自己否定という矛盾と両義性を持ち合わせている。この複雑な二重構造は、当時の社会が抱えるジェンダー間の問題の複雑さを示していると言えるだろう。

『ボヴァリー夫人』は、エンマという1人の女性が、自由に生きたいと願い、奔走し、失敗する物語である。フロベールは、男性化するエンマに、社会規範に対する反抗の萌芽と男性優位社会を受容という二重の意味を持たせ、自由を願った1人の女の人生における葛藤を描き出した。満たされない結婚生活と閉塞感に耐えかねて男性を模倣し、精神的に自由を得たはずのエンマが、実は、男性優位社会を認め、強化しているという構造は、皮肉と悲しみに満ちている。フロベールはエンマの淪落の人生を通して、七月王政期における中産階級の女性たちの惨めさや苦悩を表現しただけでなく、規範から外れた女のなれの果てをイロニックに描いたのであろう。一方で、男性を模倣しても幸せにはなれなかったエンマを通して、当時の男性の価値観や男性優位社会の

愚かさをも描き出しているのかもしれない。

本論文では、エンマの男性化が矛盾した2つの意味を持つことは指摘できたが、その理由については十分に考察できなかった。エンマを男性化させたフロベールの意図も言及しきれていない。今後、エンマの男性化を考察していく上で、当時の社会背景やジェンダー構造についても、詳しく分析する必要があるだろう。これらについては、筆者の今後の課題としたい。

(研究紀要編集部は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する。2010年11月15日付)